

教宣 せぶん

長野支店前行動

地方都市要請行動の先陣を切って、21日、長野市および長野支店で抗議要請行動を行ないました。早朝7時40分より県庁前での宣伝行動を皮切りに、8時30分より支店前宣伝行動、9時より長野支店要請、その後労組回り、マンションビラ入れ行動、繁華街宣伝を行い、12時から行なった長野駅前宣伝行動でこの日の活動を締めくくりました。1000枚用意したビラをまき切りました。

長野県労連の全面的なバックアップを受け、傘下の他労組の方々がこの日の行動を支えてくれました。長野支店への要請では、相変わらずの玄関前対応で、支店長の代わりに対応した松尾GLは名刺も出さないという非礼で、お粗末な対応に終始しました。この対応に労連の方々も

「どこの企業に要請に行ってもこんなふざけた対応をする会社はない。私も個人的にこの会社の保険に入っているがこんな無礼な企業だとは思わなかった」

「あなたの後ろに10人くらいの人間がガン首を並べて控えているが仕事をしなくても良いのか？こんな対応をするよりも中に代表を入れてあなた一人が対応すればもっとものがスムーズにそして穏やかにすすむではないか」

「いまは外勤社員の問題だけど、いずれ後ろに控えている自分たちの問題にもなるのではないか。わかっているのか」と怒りを隠しませんでした。

私たちが発する当たり前の問いかけに、対応した松尾GLは、問答になっていないことを充分理解しつつ、与えられた言葉の「支店としては聞く立場にないので」を繰り返すのみで、その声のトーンはだんだん自信がない、小さなものになっていきました。思い込みや上からの押し付けではなく、自分の耳で私たちの主張を聞き、私たちの訴えを聞き、自分の目で私たちの活動を見て、自分の責任で判断することはできないのでしょうか。そのうえで玄関前での対応とするなら、自分の言葉でその理由を堂々と述べればよいと思います。であるならば、少なくともオーム返しの「支店としては聞く立場にないので」よりはその言葉に説得力があったはずです。こんな上司の命令に忠実に従うしか示せない姿勢で、この会社は「存亡の危機」から脱却できるのでしょうか？自分の判断で行動ができないようで「法令順守」が貫けるのでしょうか？「改革」とは名ばかりで東京海上の「殿様」「官僚」体質は、いささかなりとも変わっていないとあらためて感じました。「存亡の危機」と叫んでいますが、その実は誰もそんな気持ちになっていないことがよくわかりました。

支店長やGLは毎日のように管下社員にメールを配信し、もっともらしく「変革」や「お客様第一主義」を説いています。しかし、従業員を変えようとする前にまず自分が変わることをおすすめします。